

教育プログラム推進と地域連携活動の 在り方に関する検討

—エデュテイメント大学活動を通して (1)—

眞榮城 和 美
浅 岡 靖 央
目 良 秋 子

問題と目的

大学（教育プログラム）と地域との連携活動に関する現状把握

大学と地域との連携活動の現状については、地域実践活動に関する大学教員ネットワーク（総務省、2011）が、地方自治体を対象として調査を行い、1,416の自治体から得た回答を元に、「大学との連携活動を実施している（していた）自治体」が50%を超え、「大学との連携活動の実施を検討または構想している自治体」も15%であったことを報告している。このように、多くの大学と地域が連携し、さまざまな課題に取り組んできている。また、大学・地域連携活動の成果として、「大学に集積する知識、情報、ノウハウや若い人材力の活用、地域の活性化が図られたこと」が挙げられている。さらに、「学生による外部からの刺激・気づきを得られたこと」「実践活動がメディアに取り上げられたことによるPR効果」についても成果として触れられている。

大学と地域が連携してきた事例の具体的内容については、「地域おこし・地域活性化関係」が68.1%と大半を占め、「教育・文化・スポーツ関連」（大学の施設を利用した理科実験、小学生向け美術鑑賞ワークショップなど）

15.8%、「健康・医療・福祉・子育て関係」8.9%、「環境関係」4.1%、「その他」（ICTを活用した地域活性化方策の提言など）3.1%と報告されており（総務省、2011）、地域活性化関連への期待の高さがうかがえる。

私立大学における地方創生人材の育成、地域社会貢献等に関する取り組み事例（文部科学省、2017）においても、「過疎化対策支援」・「地域の食育活動」（羽衣国際大学）、「地域づくりコーディネーターの養成・認定」（松本大学）など、地域資源の発掘等に関する調査研究や地域ブランドの推進、観光面でのアクションプランが中心となっている。また、私立大学等改革総合支援事業（文部科学省、2017）として、各大学の特色化・資源集中を促し、複数大学間の連携、自治体・産業界等との連携を進めるためのプラットフォーム形成支援タイプが新設され、タイプ1「教育の質的転換」、タイプ2「地域発展」、タイプ3「産業界・他大学等との連携」、タイプ4「グローバル化」、タイプ5「プラットフォーム形成」の5つのタイプのいずれかに該当する取り組みを行っている場合には支援助成を申請することが可能となっている。このように国の支援事業を活用しながら、大学と地域の活性化を目指すことは私立大学においては喫緊の課題であると言える。

白百合女子大学の所在地である東京都調布市の地域課題としては、都市計画マスタープラン（調布市、2014）で複数挙げられているが、文系大学である白百合女子大学人間総合学部の3学科（児童文化学科・初等教育学科・発達心理学科）の専門性との連携可能な取り組みとしては「地域コミュニティの促進」が該当し、具体的には「住民同士のつながりが希薄となりつつあり、多世代のふれあいと憩いの場となる、身近な交流の場づくり」（調布市、2014）が求められているものと考えられる。そこで、近年注目されているエデュテイメント大学の実施という形式を取り、地域のニーズに沿った、大学と地域との連携事業をデザインすることとした。また、先に挙げた、私立大学等改革総合支援事業のタイプ1「教育の質的転換」の中

にも挙げられている「シラバスの改善（主体的な学修を促す教育課程の編成）」も視野に入れ、学生の主体的学びを促進する取り組みとして、大学のカリキュラムと地域連携活動との連動による学生の学びの促進をねらいとした教育プログラムの構築を目指すこととした。なお、教育プログラムを構築する際には予算的裏付けも必要となったことから、大学内の教育プログラム推進助成制度（学生の教育に役立つ事業を支援する学内的取り組み）を活用する方針を選択した。

エデュテイメントとは

エデュテイメントとは、教育を意味するエデュケーション（education）と、娯楽を意味するエンターテインメント（entertainment）を合わせた造語である。近年、注目を集めている企業とアミューズメントパーク連携型エンターテインメントについてもエデュテイメントと表現されることがあり、代表的な活動としては「キッズニア」や「グッジョバ（よみうりランド）」が挙げられる。また、大学エデュテイメントも活発化してきており、2017年度の夏休み期間中には全国190大学で446イベントが開催されたとの報告もある（ReseMom、2017）。理系大学での開催が多いエデュテイメント大学であるが、文系学科でも、「カウンセリング入門！」（白鷗大学）や、「えいご村キャンプ」（聖学院大学）など、多種多様な取り組みが展開していることがうかがえる。このように、文系学科が実践するエデュテイメントに対する社会的ニーズも高まってきているものと考えられる。

学生の学びを促進する地域連携活動

大学と地域との連携においては、これまで述べてきたように、「地域の活性化」といった観点から地域貢献の側面が重視される傾向がうかがえるが、大学側としても大きなメリットがある。近年、初等・中等教育のみならず

高等教育においてもアクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）が推奨される中で（例えば中央教育審議会、2013）、大学内での学びのみならず産学官連携による学生の学びの促進・深化が目指されている。

ボランティア活動による学生の成長に関する研究からは、机上での学びが実践と結びつき、主体的な学修姿勢の形成、社会人としての資質能力の向上といった学生の学びの肯定的変化が指摘されている（例えば、宮下・黛・秋元・白石、2006、作田、2007、眞榮城・西、2008）。つまり、エデュテイメント大学の開催による大学と地域の連携活動の実施は、学生の学びのフィールドを拡張することにつながり、学びの促進・深化も目指すことが可能となるものと考えられる。

本論文の目的

以上の観点から、本論文においては、白百合女子大学教育プログラム「人間総合学部エデュテイメント大学」の各プログラムに参加した学生の学びの様子と地域の参加者たちの様子から、今後の教育プログラムの実施方法と地域連携事業の在り方について検討することを目的とした。なお、「人間総合学部エデュテイメント大学」は白百合女子大学教育プログラム推進助成制度に応募し採択となった企画であり、2017年度は7つのプログラムが実施可能となったが、本論文においては初回に実施した2つのプログラムについて重点的に検討し、その結果に基づき今後の活動の発展に寄与する情報整理を行うこととした。

方法

プログラム開催までの流れ：2016年度内に全プログラムの概要について確定（Table 1 参照）し、2017年5月より本格的な準備を開始した（事務作業担当者を1名配置）。その後、広報活動を展開。チラシの作成は6月

中に完了し、7月から配布した（調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課を介して調布市を中心に配布）。調布市の協賛を得ることが可能となり、開催時には協賛であることを明記した（2回目以降のチラシにも調布市協賛であることを記載）。各プログラム担当教員が授業内で学生とともにプログラム準備に取りかかった。表現ワークショップはせんがわ劇場アウトリーチ活動部門との共同開催のため、担当者が授業時に学生と実践を通した打ち合わせを行った。

初回プログラム実施対象者および実施時期：実施対象者は、児童文化学科主催「紙芝居の魅力」（担当：浅岡靖央）に参加した学生8名（平均年齢20.00歳，SD=1.00）、地域参加者8組（父母9名、子ども12名－2歳～9歳）、発達心理学科「表現ワークショップ」（担当：眞榮城和美）に参加した学生9名（平均年齢20.82歳，SD=.75）、地域参加者6組（母親6名、子ども7名－7歳～9歳）、実施時期は2017年8月5日（土）であった。

Table 1 白百合女子大学人間総合学部エデュテイメント大学2017内容

開催日時	タイトル	対象	担当学科・担当者
8月5日(土)	紙芝居の魅力 見る・聞く・演じる、楽しさ体験	幼児～小学校6年生と保護者	児童文化学科 浅岡靖央
	表現ワークショップ 人前で話せるようになるヒント教えます	小学校3～6年生と保護者	発達心理学科 眞榮城和美
10月28日(土)	からだであそぼう！ 親子で楽しむ運動遊び	4歳(年中)児・5歳(年長)児と保護者	初等教育学科 石沢順子
	しぜんとあそぼう！ 親子でキュッキュ、バードコール作り	4歳(年中)児・5歳(年長)児と保護者	初等教育学科 土橋久美子
10月28日(土) 29日(日)	くるくるアニメおもちゃを作ろう！	5歳～小学校6年生(未就学時は保護者同伴)	児童文化学科 やたみほ
11月23日(木祝)	今日はとことんリラックス	幼児から小学校6年生と保護者	発達心理学科 眞榮城和美
2月10日(土)	「カルピス」こども乳酸菌研究所	小学校4～6年生と保護者	初等教育学科 大貫麻美

調査内容：参加学生には実施前と実施後に地域連携活動に関する意識調査を行った。調査項目は、ボランティア活動継続動機測定尺度（妹尾、高木、2003）を使用した。なお、今回の活動はボランティア活動という表現よりも地域連携活動という表現を用いることが相応しいと考えられたため、教示部分と2つの質問項目で用いられている「ボランティア」という表記を「地域連携活動」に置き換えて用いた。本尺度は自己志向的動機（自分の持っている知識、技術をつかう練習になる、自己を再発見し、成長させることができる、余暇が有効に使える等からなる5項目）、他者志向的動機（人に喜んでもらえる、人や社会の役に立てる、人はお互い助け合わねばならず、自分にもその義務がある等からなる6項目）、活動志向的動機（活動を通じて積極的に社会参加できる、喜んだり楽しんだりできる、友人を得ることができる等からなる5項目）の計16項目から構成されており、回答方法は、非常にあてはまる：5～まったくあてはまらない：1までの5件法であった。また、実施前には「本活動に期待していること」、実施後には「本活動の感想と今後の活動に期待していること」について自由記述を求める回答欄も設定した。

表現ワークショップ・プログラムでは、参加児童に対してプログラム参加前後での不安傾向を測定するために、SCASスペンス児童用不安尺度（石川、1994）38項目への記入を求めた。

結果

紙芝居の魅力

プログラム目的：プログラムの副題にあるように、参加者一人ひとりが紙芝居を「見る・聞く・演じる」ことで、紙芝居がもたらすさまざまな楽しさを体験してもらうことを目的とした。

今日、紙芝居が日常的に演じられている場所は、保育所や幼稚園など幼

児保育の現場以外にはほとんどない。したがって、そうした現場で保育者が演じる紙芝居を「見る・聞く」体験は、子どもたちにとっては特別なことではない。しかし、自らが紙芝居を「演じる」体験は、子どもにはほとんどないと推測される。一方で子どもの保護者は、家庭でわが子を対象に紙芝居を「演じる」体験は稀にあるかもしれないが、大人になってから誰かが「演じる」紙芝居を「見る・聞く」体験は珍しいことと言ってよいであろう。まして、我が子が「演じる」紙芝居を「見る・聞く」ことは、ほとんどの保護者が未体験と考えられる。

こうした状況の背景として、そもそも紙芝居作品が一般家庭にとっては手の届きにくいものであるという事情がある。たとえば書店に足を運んでも、絵本や児童書は多数並んでいるが、紙芝居作品はまず見られない。公共図書館の子ども室などには紙芝居作品も配架されているが、絵本や児童書に比べると圧倒的にその数は少ない。さらに、紙芝居を演じる際、大人にとっては十数枚の紙束を手で立てかけることはそれほど難しいことではないが、意外に力も必要で子どもにとってはたやすいことではない。その点を補うものとして、紙芝居を差し込む専用の木製舞台も存在するが、保育所や幼稚園でさえその準備のないところは少なく、家庭にはまずないと言ってよい。

そこで、一定数の紙芝居作品と紙芝居舞台を準備することで、保護者とその子どもたちが、普段なかなか味わうことの難しい紙芝居の楽しさをたっぷり体験できる環境を提供しようと考えた。紙芝居をお互いに「見る・聞く・演じる」ことで、保護者と子どもたちに、日常生活にはない特別な時間を楽しんでいただくことをめざした。

内容：参加家族8組（保護者9名、子ども12名）を対象に、前期授業「児童文化・紙芝居」を通して紙芝居の実演スキルを身につけた学生たち8名とで、下記のプログラムを実施。紙芝居作品については、授業を通し

て学生たちが選択した21作、担当教員が選択した37作、計58作を用意し、白百合女子大学図書館よりお借りしたブックトラック2台に配置した。また、紙芝居舞台も各家族に1台ずつ準備した。保護者には体験後にアンケート、学生には事前事後に「地域連携活動に関する意識調査」を実施した。

プログラム

1. はじまりのごあいさつ [スタッフ紹介、プログラムの説明] (学生2名)
2. 紙芝居実演 参加型作品『よいしょよいしょ』(学生)
物語型作品『ねむらぬくに』(担当教員)
3. 家族ごとに分かれて紙芝居を自由に楽しむ時間 (各家族に学生を1名ずつ配置)
 - ①学生スタッフによる紙芝居実演
 - ②保護者の実演、子どもの実演、学生スタッフのサポート
4. おしまいのごあいさつ [表彰式]、アンケート記入



Figure 1-1 紙芝居の魅力 (引用：調布市HP)



Figure 1-2 紙芝居の魅力

参加者の様子

はじめに参加者全体に対して学生と担当教員による紙芝居実演（プログラム2）を行ったが、保護者も子どもも前のめりになって熱心に紙芝居を楽しんでいた。その後、各家族に分かれ、学生も1名ずつそこにまじって、

学生、保護者、子どもたちが相互に実演を繰り返しひろげていった。ほとんどの家族で、子どもたちが一所懸命に紙芝居を実演する姿が見られたことは予想外であった。中には、まだあまり文字が読めないにもかかわらず、学生が脚本を小声で読んであげて、それを復唱する子どもの姿もあった。体験後のアンケートでも、「子どもが初めて自分で読むことができ、とても楽しかったようです」（6歳／幼稚園年長児の保護者）とあり、さらに「子どもの目線でイベントが行われており、大学での開催で不安でしたが、とても楽しく過ごすことができました」（5歳／幼稚園年中児と2歳児の保護者）という回答も見られた。

学生たちの学びの姿

準備期間中の学生の学び

前期授業「児童文化・紙芝居」においては、当初のシラバスを一部変更し、このエデュテイメント大学において、子どもや保護者とともに紙芝居を十分に楽しめるようにするために、学生一人ひとりの実演スキルを高めるためのワークショップを繰り返し実施した。

ほとんどの学生は、これまで紙芝居を見たことはあっても、自ら実演するという経験は持ち合わせていなかった。しかし、1対1の実演、学生全員を観客にした実演、小グループ内での実演と、形態を変化させながら、時には担当教員が作成した評価表によって、紙芝居実演に求められる特有のポイント（声の出し方・間の取り方・紙を抜く技法など）について相互に実演を評価し合うことで、みるみるそれぞれのスキルを高めていった。

その後提出された評価表には、「前に立つことにビビらないこと」、「（声について）聞き手からすると、自分が思っているよりももっと大きな変化が必要なのだと思った」、「つい聞き入ってしまう間を実現するために、紙芝居の内容をしっかりと把握したい。大胆でありながら自然な間を生み出し

たい」、「自分に合う作品選びも重要なのだと感じた」など、紙芝居実演に対する認識の深まりを感じさせる感想が多く見られた。

プログラム当日の学生たちの学びの姿

学生たちの地域連携意識：地域連携活動意識調査の3因子（自己志向的動機・他者志向的動機・活動志向的動機）について、プログラム実施前後における変化を検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、どの因子においても有意差は認められなかったが、自己志向動機および活動志向動機の得点がやや上昇傾向にあることが確認された（Table 2 参照）。

Table 2 学生たちの地域連携意識（紙芝居の魅力）対応のある t 検定

	実施前 (SD)	実施後 (SD)	t	
自己志向的動機	3.75 (.33)	3.95 (.37)	1.02	<i>n.s.</i>
他者志向的動機	3.58 (.33)	3.54 (.21)	.32	<i>n.s.</i>
活動志向的動機	3.68 (.37)	3.75 (.58)	.47	<i>n.s.</i>

次に、各項目における変化について対応のある t 検定を行った。その結果、自己志向的動機の「余暇が有効に使える」において、実施前より実施後の得点が有意に上昇していることが認められた（実施前： $M=3.13$ ($SD=.64$), 実施後： $M=3.75$ ($SD=.46$), $t(7)=3.42$, $p<.01$)。有意差は認められなかったが、「自己を再発見し、成長させることができる」（実施前： $M=3.88$ ($SD=.35$), 実施後： $M=4.13$ ($SD=.64$)) 「自分の知識、経験、技術を活かすことができる」（実施前： $M=3.75$ ($SD=1.03$), 実施後： $M=4.00$ ($SD=.53$)) の得点も実施後において上昇していた。

学生たちの感想から

プログラム実施の後日、学生たちに提出してもらった感想レポートより、いくつか紹介しておきたい。

- 思った以上に紙芝居は子ども受けがいい。特に舞台に対してとても興味を持っていた。

子どもやその親たちが楽しそうな表情を見せていたのを見られたことはよかった。

- たくさんの子どもや保護者と触れ合うことができ学ぶことも多くあった。子どもたちは思っているよりもおとなびている。(子どもが実演する際に)“抜きながら”などの指示もきちんと見逃さずにこなしており、中身はとても大人なのだなと感じた。
- ゆっくり読む方が聞き取りやすくて反応が良いのだと実感した。また、教室全体へ聴かせるためには、滑舌も大事だなと思った。
- 紙芝居はただ文字を読むだけではなくて、自分でアレンジを加えたほうが人をひきつけることができるということを改めて学んだ。
- 紙芝居を「読む」レベルだと、子どもの顔や反応を見ることが出来ないことに気づいた。

余裕を持って「演じ」られるようになりたい。初見の紙芝居を演じてみて、下読みの大切さも感じた。

表現ワークショップ

プログラム目的：プログラムの副題になっている「人前で話せるようになるヒント教えます！」を体験的に学んでもらうことを目的として実施。現代の小学生の悩みとして「人前で話すことが苦手」（プレジデントオンライン、2016）が第5位に挙げられていることから、参加者である小学生たちが「人前で話しをしたり、自己表現をすること」への抵抗感、不安感を低減することに役立つプログラムの実施を目指した。

内容：せんがわ劇場アウトリーチグループの櫻井拓見氏、たけうちみずゑ氏、柏木俊彦氏、末永明彦氏を迎え、事前学習の場で実践指導を受けた

学生たちを中心に参加小学生とその保護者とともに、下記内容を体験。体験前後には参加者に対して「事前事後アンケート」、学生に対して「地域連携活動に関する意識調査」への記入を求めた。

活動の流れ（櫻井、2017）

1. アンケート記入
2. 自己紹介
3. 身体に番号をつける
4. 身体の一部で空間に名前を書く
5. 「好きな動物・食べ物」をポーズであらわす→それをみんなで真似する
6. 「ファイブシーン」づくり
→「好きなものファイブ」（好きなものを5つ、A4用紙の設定された枠に記入していく）のひとコマずつにポーズを決め、5つつなげてやってみる
7. 空間を歩いて即興グループ分け（5人一組へ）
8. グループごとに簡単な自己紹介
（名前と何か一言と「ファイブシーン」を一人一人披露）
9. グループ対抗オノマトペ当てゲーム
10. グループごとに「ファイブシーン」に音をつける
11. 全体の振り返り 表彰式
12. アンケート記入

参加者の様子

プログラム体験前後の時間帯にSCASスペンス児童用不安尺度（石川、1994）の記入が可能であった3名（女兒：平均年齢7.67歳（ $SD=0.58$ ）を対象として、各因子（パニック発作と広場恐怖・強迫性障害・外傷性恐怖・

社交不安障害・全般性不安障害・分離不安障害) および合計得点についてプログラム体験前後の得点変化について検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、社交性不安障害得点においてプログラム体験前より体験後の得点が低下傾向にあることが認められた(体験前:平均得点7.67 ($SD=4.72$), 体験後:平均得点6.33 ($SD=4.04$) $t(2)=2.00$, $p<.10$)。

プログラム体験を通して、せんがわ劇場アウトリーチ担当者、学生と一緒に身体を動かしながら楽しそうに自己表現をしている参加者(児童とその保護者)の姿が見られ、体験後のアンケート時には、参加児童から「明るい性格になれそう」との回答が得られた。



Figure 2 表現ワークショップ(調布市HP)

学生たちの学びの姿

準備期間中の学生の学び

準備期間中の学生たちの学びの姿について、せんがわ劇場アウトリーチ担当者との事前学習時の振り返り時のコメントを一覧にし、自己への気づき・他者(状況)への気づき・活動への期待の3つに分類した(Table 3 参照)。

Table 3 表現ワークショップ事前学習時の学生の学びの姿

自己への気づき	他者（状況）への気づき	活動への期待
普段は考えてから行動するタイプだが、今回は余計なことを考えずに動くことができた。	身体をうごかしてからの方が笑顔の人が多くなった。	保育の授業などで学生たちは体験しているかもしれないが、小学生も楽しめる内容だと思った。
「自分を表現する」という活動に対しては、教室の端に立って眺めているタイプだが、今回の活動は楽しいと思えた。	大学の授業では、これまで個々に活動することが多かったが、みんなで何かするとこの楽しさを実感した。	「自由な身体を獲得していくこと」だと感じた。
動くのが面倒で皆で動くことが面倒な方だが自然と笑顔になった。	何人グループに分かれるのかによって、個々の表現が異なることに気づいた。	もっと言葉を使うのかと思いついて、身体で表現することの自然さが面白かった。

プログラム当日の学生たちの学びの姿

学生たちの地域連携意識：地域連携活動意識調査の3因子（自己志向的動機・他者志向的動機・活動志向的動機）について、プログラム実施前後における変化を検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、活動志向的動機の得点が実施前より実施後に上昇することが確認された（実施前： $M=3.35$ ($SD=.96$)、実施後： $M=4.10$ ($SD=.74$)、 $t(7) = 3.64$, $p < .05$, Table 4 参照）。

Table 4 学生たちの地域連携意識（表現ワークショップ）対応のある t 検定

	実施前 (SD)	実施後 (SD)	t	
自己志向的動機	4.05 (.25)	4.15 (.25)	0.58	<i>n.s.</i>
他者志向的動機	3.79 (.58)	3.83 (.72)	0.19	<i>n.s.</i>
活動志向的動機	3.35 (.96)	4.10 (.74)	3.64*	

* $p < .05$

次に、各項目における変化について対応のある t 検定を行った。その結果、活動志向的動機の「毎日の生活に充実感がでる」において、実施前より実施後の得点が有意に上昇していることが認められた（実施前： $M=3.00$ ($SD=.82$)、実施後： $M=3.75$ ($SD=1.25$)、 $t(7)=3.00$, $p < .05$)。

アンケートの自由記述

学生たちの当日の学びの姿について検討するため、アンケートの自由記述欄への記入の内容を一覧にした（Table 5 参照）。

Table 5 学生たちの学びの姿（自由記述およびインタビューから）

実施前	実施後
普段と異なった視点で授業を受けるような感じになれると思うので、新鮮な物の見方ができたらいいなと思います。	自分の好きなものや好きなことを表現することが「自分自身を表現する」ことにつながっているのだと感じた。良い経験になったと思う。

参加者への表彰

各プログラムの終了時には参加者に対して、表彰状を手渡した（Figure 3 参照）。



Figure 3 参加者への表彰（調布市HP）

考察

学生の学びを促す教育プログラムの在り方

「紙芝居の魅力」、「表現ワークショップ」ともに「地域連携活動意識」については、一部変化が認められた。「紙芝居の魅力」においては、学生たちが地域連携活動に参加することに対して、自分自身の余暇活動の充実化につながる実感を持たれた様子が認められ、また、「自己を再発見し、成

長ささせることができる」可能性や、「自分の知識、経験、技術を活かすことができる」機会となることも体験的に学ぶことができたものと言えよう。「表現ワークショップ」では、参加した学生たちの「活動志向的動機」が高まっていたことから「人に喜んでもらえる」、「人や社会の役に立てる」といった気づきを得る体験になったものと考えられる。

参加学生が授業時間を活用して事前準備に取り組んでいたため、当日のスムーズな運営につながったこと、また、事前学習からの参加が、学生の学びを促進する要因になっていることが推察される。

地域との連携の在り方

今回の試みについては、大学と地域が包括協定を結んでいることにより、大学所在地の市との連携を強化することができ、本イベントに対しても市の協賛が得られたことにより、広報活動が充実化し、地域住民の参加が促進されたものと言えよう。また、「実施をしたら終了」という形式では無く、実施後の報告が市のHPに情報が掲載される（調布市生活文化スポーツ部、2017）など、白百合女子大学人間総合学部エデュテイメント大学における地域連携の基礎がある程度構築できたのではないかと考えられる。

大学と地域の連携について、深沼（2010）は、地域連携活動を継続していくことで連携自体にどのような効果があったのか、また、継続によって生まれた新たな方向性を探り、取り組みを存続させるための課題と克服方策について複数の大学の事例をまとめ、「大学内や地域での協力体制が整っていくことで活動が洗練されること」、「新たな担い手やターゲット、他の地域、異なるタイプの連携といった広がりをもたせること」、「連携を継続するために、学生、教員、地域の担い手が活動維持への工夫を行っていること」の重要性を指摘している。また、文部科学省は、大学等における地域人材育成及び地域イノベーションの創発（文部科学省、2017）の中で、

私立大学の取り組みに対する支援タイプとして、タイプ1「教育の質的転換」、タイプ2「地域発展」、タイプ3「産業界・他大学等との連携」、タイプ4「グローバル化」、タイプ5「プラットフォーム形成」を挙げている。今回の取り組みはタイプ2「地域発展」に一部該当するものの（自治体との包括連携協定の締結・地域社会と連携した地域課題解決のための教育プログラムの観点）、全学的地域連携センターの設置といった点はクリアできていない。これらの指摘を鑑み、本活動を維持・発展させていく際には、目的を明確にしながら全学的に取り組んでいく必要があるだろう。

今後の課題

最後に、今後の課題について整理しておく。

これまでみてきたように、全国的に私立大学において精力的に展開されている地域連携活動を、本学においても教育の特色のひとつとして継続的に推進していくことが望ましいだろう。その理由として、ひとつには私立大学等改革総合支援事業の支援助成を受けることが本学の教育の内容・質を保障することともなり、それが外部へのアピール、本学の教育の信頼性を得ることに繋がるからである。しかし、このこと以上に、本学が育てたい人間像が、「知性と感性との調和のとれた女性、他者のために、社会のために、何ができるのかを探求しつづける女性」にあるとするならば、大学で学ぶ専門性を社会で生かす術も身に付けていくことが必要と考えるからである。その意味において、今年度初めて人間総合学部の3学科が地域へ向けた学生の学びを発信したことは、今回の調査結果にもわずかではあるが確認できたように、大学で得た知識が体験を通してあらたな学修意欲へと起動するもとなったことが示され有意義であった。今はまだ授業や大学が推進する活動といった用意された環境のなかでの学生の成長であるが、経験を重ねることで社会に出た後それらを生かした形でより主体的な

社会貢献をすることができるだろう。継続的に、学生の主体的学びを促進する取り組みを考えていくことも課題である。

こうした学生、教職員、地域が活動維持への工夫を行っていくためには、大学内に地域連携部署、地域と繋がる専門的窓口が欠かせない。そこは、単に社会との繋がりを担うだけではなく、学内各部署との連携を担う、いわば外と内のジャンクション機能を持ち合わせた重要な部門である。今後、こうした専門的部署が出来ることを切に願う。

また、大学から何を発信するのか、ということも課題である。一方的に、大学に集積した知識を社会へと発信していても、受け手の市民が望むことと合わなければ意味がない。調布市、地域のニーズを聞く機会を持つことも今後必要なこととなっていくであろう。そのためには、まず本学の教育活動を地域に認知してもらう広報も重要である。日頃、個々の教職員が行ってきた連携のほか、大学という大きな枠だけではなく各学科や教員のブログなどでの情報発信や地域の行事などへのより積極的な参加も効果的と考える。

初年度の活動を振り返り、大学内そして大学外との密接な連携により、学生とともに育つプログラムを計画、実践していける継続的推進力をつけていきたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2013 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ 第82回総会答申, 1-26.
- 深沼光 2010 大学と地域の連携-継続の効果と課題-日本政策金融公庫論集, 第7号, 21-47
- 石川信一 1994 SCASスペンス児童用不安尺度 (日本版) サクセスベル
- 宮下孝広・黛雅子・秋元有子・白石高士 2007 学生ボランティアによる地域と学校と大学との連携の試み (第一次報告) 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 第10号, 13-20.
- 眞榮城和美・西一夫 2008 学習チューター活動による大学生の自己成長過程と学生支援体制に関する検討 清泉女学院大学人間学部研究紀要, 第5号, 3-17.

- 文部科学省 2017 地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議 私立大学における地方創生人材の育成、地域社会貢献等に関する取り組み事例
- 文部科学省 2017 私立大学等改革総合支援事業
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm
- プレジデントオンライン 2016 親にはわからない「小学生の悩み事」ランキング
<http://president.jp/articles/-/18124>
- ReseMom 2017 夏休み2017 体験イベントin大学 全国190大学の子どもの向け情報を検索 <https://resemom.jp/article/2017/06/15/38686.html>
- 作田良三 2007 「社会人としての資質能力」の向上に対するボランティア活動の効果 日本教師教育学会年報2007, 119-129.
- 妹尾香織・高木修 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, 18, 106-118.
- 総務省 2011地域実践活動に関する大学教員ネットワーク 総務省地域力創造グループ 人材力活性化・連携交流室 大学教員との地域実践活動の現状について 地方自治体を対象としたアンケート調査とりまとめ結果
- 調布市 2014 まちづくりの現況と課題 住み続けたい緑につつまれるまち調布 調布市都市計画マスタープラン, 第3章, 20-35
- 調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課 2017 白百合女子大学で新プロジェクト「エデュテイメント大学」が開催される エデュテイメント大学第1弾が開催 <http://www.city.chofu.tokyo.jp/www/contents/1502152069823/index.html>

謝 辞

まずは、イベントに参加していただきました地域のみなさまに心より御礼申し上げます。今後の活動にも是非ご参加いただけましたら幸いです。調布市生活文化スポーツ部生涯学習交流推進課の武田悠児氏には、広報活動・当日取材・HP記事作成と多岐に渡ってご活躍いただきました。せんがわ劇場アウトリーチ活動部門の櫻井拓見氏、たけうちみずゑ氏、柏木俊彦氏、末永明彦氏、古崎隆彦氏には「表現ワークショップ」にてご尽力を賜り、演劇のプロの力を体感させていただく貴重な機会となりました。プログラムのノベルティグッズ製作に際しましては鳥羽澄子氏にご協力いただき、素敵なクリアファイルが完成しました。本イベントのチラシデザインは、本学非常勤講師の柳田寛之先生に作成していただきました。イベントイメージに合う素晴らしいデザインとなり、企画者一同、感激しておりました。最後になりますが、多くの学内関係者の皆様から、本プログラム実施に対して力強いエールとさまざまなアイデアを頂戴しましたことに対して改めて感謝申し上げますとともに、さらなる学内連携・協働力向上を目指したくお願い申し上げます。